

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 140 号

平成25年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三「はまなすのこみち—私の歩んだ道—」より (2)

人生の選択

私は高等学校の頃、18歳位の人生に目覚めたときから「お前は何の為に勉強するんだ」、「何のために一生を用いようとするんだ」、「人間らしい人間とはどんな人間なんだ」という問いを自覚しました。これは今日でも共通な問題ではありますが、人間であれば誰でもこの問が必ず一度は問われなければならないと思うのです。これは人間の特権であります。他の生物はこの問いを受ける資格はないのであります。人間にとってこの問いこそが大事な問いであります。その問いは人生に何回来るか分かりませんが、必ず来る。その声は蚊の鳴くような声かもしれません。その声を聞き捨てるわけにはいかなかったということが私の人生の第1歩でありました。皆さん、どうですか。おそらく皆さんがここに足を運ばれたのはその問いのためだと思うのであります。「何のために自分が生きるんだ」、「自分の一生を何のために捧げるんだ」、これは人間だけに問われる問いであります。この問いを誤魔化すか、聞かないふりをするか、それが人生の岐れ目であると私は自分の体験上思うのであります。…

私は幸いにしてその低い声を聞くことができ、その問いをなんとかしてどこかで何時の日にか解決してもらうことを期待して大学に

進んで来たということをおぼろげに思い出します。この問いに対しては本を漁っても納得できる答えは容易には出て参らないのでありますが、幸いにして、私は友人の勧めでキリスト教の求道者の寄宿舎に入りました。それは本郷西片町にある東大の学生の寄宿舎でありまして、そこに三年間いる間に、初めて聖書というものを学ぶ機会を得た。それ以前にもキリスト教のことは多少は見聞きしておりましたし、日曜学校なんかも子供の時言ったことがあるんですが、キリスト教の何ものであるかは本当に深く考えたことはなかった。しかし、この求道者のための寄宿舎に居る間に真の人間像を求めて先輩やいろいろな伝道者の話をよく聞きに行ったのでありました。

人生のわかれ道

私は、大学の薬学に入ったけれども、大学の講義では学問の本質を教えられるわけでもなく、単なるテクニックや知識の断片を教えられるだけの様な気がしまして、学問の目的や人生の目的というような基本的な問題について話してくれる先生は居なかったものがありますから、私はもう大学はつまらんところだという気になってあまり勉強しなかった。しかし、入った以上は卒業しなきゃいかんから多少誤魔化して勉強した程度でありました。しかし、幸いなことに大学の最後の一年は研究室に入って自然のからくりを学び、学問に対する畏敬の念を教えてもらった。学問は非常に厳粛なものであること、その学問の真実を学ぶ態度を研究室の一年間から学んで、私は別に学者になるつもりはなかったし、研究者になるという野心もなかったのですが、一年間科学・自然と対決して、私のような者でも自然から学ぶことによって学問に貢献できるんだという多少の自信をもって大学を卒業したのは私の非常な感謝であります。大学の学習の中からは、最初の問いに対する答えを得ることはできません。止むを得ず、時間があれば先輩の話しや伝道者の話しを聞いたり、バイブルクラスに出席して一生を伝道に捧げた人のパーソナリティに接したり、また幸い内村鑑三が聖書研究会を開いていたものですから日曜の昼はそこへ行くというようなことで、求道の道を絶やさなかつただけのことです。これが私のあとあとの背骨を作ってくれたと思います。私の友人たちで青年時代にこの問いに無関心だった人々の大部分は社会に出た後、さまよえる俗人になってしまった人が多かったのであります。人生に対する喜びと希望を持つことができた人は甚だ少ないようであります。これは悲しいことでもあります。この青年時代の問いにどういう態度をとるかがやはり人生のわかれ目であります。

キリストに従おうという決心

この問いは人間だけに与えられる神の声と考えてよいのであります。我々はこの問いを大事にしていかなければならない。この問いの解決を大学では教えてくれません。けれども、自分でそれを求める心が継続しているならば、これが自分の一生を支える大事な支柱となるのだと思うのであります。幸い私は聖書を与えられ、聖書を学ぶ間にキリストの指し示すところの人間像、これにぶつかって私はこれにすっかり打たれたのであります。キリストの指し示す人生、人生のあり方はこれだ、私は若い時の祈りがここで聞かれたように思い、迷いと、あせりが無くなったような気がします。とはいうものの、まだ人生の体験も乏しく、聖書の理解も浅かったのであります。大学2年の時に思い切って洗礼を受け、キリストに従おう、キリストの言葉に従おうという決心をしたのであります。

「我は道なり、我は真理なり」

卒業して大学の門を出る時にどんな希望とどんな目標を持って出るか、これが重大な人生のわかれ道になるということだけは一つ覚えておいてもらいたい。そういう目標や指針を持っていても、この世は特にいろんな誘惑や刺激が多い。それと戦っていかなければならない。幸いにして私は良き先輩を持ち、良き先生を持ったために、比較的脱線をせずに参りました。そして私を励ました信仰は、聖書の中の今日読んで頂いたヨハネ福音書第14章の「われは道なり、われは真理なり」であります。これは単なる「道」ではない。日本語でははっきりしませんけれども、英語では I am the way, and the truth, and the life で the がついている。one of ではない。これは唯一の決まった「道」であり「真理」であります。私はこの言葉に接し、本当に何たる力強い言葉であろうかと思うのであります。

聖書は心の真理、精神の原理、魂の原理を教える

我々はよく神の存在を議論します。宇宙を造り支配し給う神は我々の目で見ること、この頭脳で理解することもできない存在であります。神は見えないけれども、ここに書いてあるように、キリストを見た者は神を見た者である。キリストはみずからそう宣言された。これは大きな救い、我々に対する力強い救いである。特に自然科学をやると、科学の本を読むようなつもりで理屈でもって聖書を読み、読み違えます。聖書は、心の真理、精神の原理、魂の原理を教えるのであって、科学の書ではありませんから、我々の小さな理性では本当のところは理解するのが難しい。聖書は全人格で全パッションで読まなければならない。皆さんは、キリスト教の大学に入り、キリスト教の教えを聞いても疑いや悩みがこもごも到るであります。これは、われわれ肉体を持った人間としてやむを得ないものであります。この世において、どうして悪が善を駆逐し、不公平が多いのだろうか。くだらない奴が大きな顔をしてのさばっているのに神はどこに居るのか。また我々が本当に理解できない不幸が我々の周囲に頻発する。こうして我々は神の存在を疑う機会が沢山あります。これは或る意味では非常に危険なことであります。私は、その因果関係は現在の我々には理解できないけれども、いつの日か分かる時が来るだろう。全能の神がこれを見ておられるのだから、これは神に委ねるべき問題で我々が軽々に判断を下すべきではないという態度でこれまでの人生を歩んで参りました。こうした問題に直面した時には、謙虚な態度をとることが大切だと思います。

80余年の人生を顧みて

現在、私は年を取って83歳になります。この80余年の人生を顧みて、この古い聖書に記された真理が少しく深く分かって来たような気がいたします。神が在るか無いかは科学的には証明できませんまい。けれども、私は、この世に正義があり、また人の世のために尽し、自分と同じように他者を愛するという真の愛があるならば、そしてまた、この世に人間というこの優れたもの、神を求め、未来を求め、善を求め、正義を求め、愛を求むる人間が存在する限り、神が存在し、神が支配しなければならないということ、たとえこの世において悪に対する審判がなくても必ずや支配者たる神がこれを審判するであろうという信仰が、おのずから人生を通して分かるような気がいたしますのであります。私は科学者であります、この信仰というものは決して不合理なものではないということを強調したいのです。現代人から見ると、宗教は人間のでっちあげで、いわゆる麻薬だというような説をとる人が多いのでありますけれども、私はそれは浅はかな考えであると思います。人生には悩みと疑いが多いけれどもこれを謙虚に考えていくとき、キリストの指し示す人間像にどこに異論を差しはさむ余地がありますか。我々はその前には頭（こうべ）を垂れる以外にないのであります。キリストの一生を見て、我々はそれに達しないけれども、我々は神の愛を知るのであります。愛がある以上、神は存在し給う。そしてこの自分の与えられた人生をそのために捧げるという決心、これが信仰だと私は思うのであります。

この真理に勝る宝はない

この世にいろいろな宗教があり、この世の教えの道も沢山ありますが、すべてこの世のものは唯一の真理であるキリストの土台の上に立たなければならない。それが事業であっても学問であっても、この土台の上に立たなければ、すべては無に帰するものだ、バビロンの塔にすぎないのだということであります。私もそれを受け入れる一人であります。さきほどK先生が言われた通り、私は薬学の出身で、薬学の使命は医学と協力して人の不幸を少しでも軽くすることであると考えて薬学を勉強したわけであります。薬を造ることが目的ではない。どうにかしてこれが悩める者のために捧げられるようにとの祈りをこめて、ただ仕事をしたのであります。大学の学問というもの単なる知識に終ってはこれは危険であります。科学の進歩というもの盲目で、これをいかに人生に役立てるかということは我々人間の責任であります。人に仕えるために科学を研究するのであり、人に仕えるための科学でなければなりません。これを私利私欲のためにあるいは国のエゴイズムのために使っては、その報いは必ず自分に返って来る。我々の一生にも同じように来る。私は沢山の例を挙げることができます。

人間に生まれた我々の特権は何かと言えば、それはキリストの指し示す真理を我々が頂く資格があるということであり、聖書がそのためにあるということでもあります。どうか皆さんが若い時の問いに前向きの姿勢で取り組み、この真理によって社会に立つ決心をして頂きたい。いかなる困難にあってもこの真理を授かったという喜び以上のものはこの世になく、これにまさる宝はない。これが、私の人生を通して皆さんに捧げる今日の証しでございます。時間が来ましたので、これで終わります。

(本稿は、同志会外会員の青山学院大学教授阿部俊一君のご厚意により再録した。)

(1984年10月16日青山学院工学部礼拝堂での伝道講演の記録より (抄))

故郷への思慕

人はみな自分のふるさとを携へてこの世に来る。
人はその与へられた環境によって育つ。
与へられたものをいかに受け止め、それを自分の生長の糧にするかは、その人の器量と選択にかかる。
おのれの道をひとりで歩いてきたのではなく、多くの人々の犠牲と恩恵によって今日あるを知る。

古里の山河はその揺籃の母である。
海や河に魚を追い、春にはわらび採り、夏にはほたる、秋にはぶどうときのご狩りに歩いた山野。
永い冬には雪と氷に戯れ、厳しい自然との戦いと交わりがある。
そこには北の国の人を育てた厳しい父がいる。

夜な夜なのいろりの語らいの中に美しい人生の芽生いがある。
吹雪の戸を叩く声に、荒海の浪の音に歌がある。
津軽三味線の哀調は我々の心の琴線に深くこだまする。
孤高を誇る岩木の山よ、
みちのくの歴史を秘める八甲田の峰と十和田の湖よ、
そこに「あすなろ」の文化が育つ。

〔東京と青森、1891年9月号巻頭言より〕